



那須正幹  
ぼくは飼育委員

画・新井由木子

1

「ええと、これで二学期の委員は、みんな決まったわけね」  
先生が黒板をみまわした。黒板には十二の委員の名前が並び、その下に男女二人ずつの名前が書き込まれていた。ほとんどが一学期と同じメンバーだ。

「あら、ごめんなさい。男子の飼育委員が、まだだったわ」  
先生が教室をみまわす。

「一学期の飼育委員はだれだったけ」

「安本くんです」

皆川久美が小声でこたえた。安本孝は夏休みに転校したから、もうクラスにはいない。

「そっかし、だったら、だれか飼育委員にならなくちゃあ。飼育委員をやりたい人……」

先生がもういちど教室を見回した。だれも手をあげない。  
「はやく決めないと、チャイムが鳴るわよ」  
先生が、いくぶんいらついた声をあげる。

「委員になってない人の中から決めたらいいと思います」  
学級委員の木戸がどなると、みんなが賛成と言った。

「委員になってない人、手をあげて」

先生の声に、ぼくはそっとあたりをみまわす。村瀬と高山がおずおずと手をあげていた。ぼくもしかたなく手を上げる。